

多様な動きの捉え方に関する一考察

—幼児期から児童期への運動遊びの接続に着目して—

湯浅 理枝¹・松尾 晋典²・松田 亮³

本研究では、教員養成（小学校教諭・幼稚園教諭・保育士）課程の実習未経験の大学生が作成する、接続期の幼児と児童を対象とした運動遊び教材を分析・検討することで、学生の多様な動きの捉えを把握し、領域「健康」を含んだ、体育に関連する授業改善および系統的な指導のための一助となる基礎的資料を得ることを目的とした。

主な結果として、大学生の作成する運動遊び教材で観察できる基本的な動きは、選定した基本的な動き 46 種類のうち、幼児・児童にとって身近な動きの 19 種類の抽出に留まった。幼児期運動指針で多様な動きを遊びに取り入れることが求められていることを鑑みると、普段の生活の中であまり行う頻度が少ない動きをあえて取り入れるという視点が必要であるが、その視点が不十分であることが学生教材において示唆された。今後については、実習経験を経て学生の多様な動きの捉え方がどのように変化するのか、また、運動遊びに多様な動きを取り入れることができるようにするためにはどのような指導内容が効果的であるかを検討することが必要である。

キーワード：運動遊び教材、多様な動き、幼児期、児童期、接続、教員養成

所属：

1. 広島文化学園大学学芸学部

Faculty of Liberal Arts and Sciences, Hiroshima Bunka Gakuen University

2. 広島文化学園大学人間健康学部

Faculty of Human Health Science, Hiroshima Bunka Gakuen University

3. 広島経済大学経営学部

Faculty of Business Administration, Hiroshima University of economics

はじめに

文部科学省が実施している「体力・運動能力調査」によれば、児童の体力・運動能力は概ね低下傾向に歯止めがかかっているものの、体力水準の高かった昭和 60 年度との比較では、一部のテスト項目を除き児童生徒の半数以上が平均値を下回っているとされている。また、パ

フォーマンステストによる低下だけでなく（森ほか、2010）、動きの質的な低下も見られている（中村ほか、2011）という指摘もある。加えて、最近の幼児の基礎的運動パターンは 84 種類のうち 7 割程度しか観察されておらず（町田・吉田、2008）、量的な発達の低下も課題といえるのではないかと示唆されている。



このような状況を受けて、2012年には幼児期運動指針が策定され、その指導のポイントのひとつに、「多様な動きの経験」が挙げられている(文部科学省, 2012)。吉田(2015)は、「多様な動き」には2つの意味があるとしている。1つ目はいろいろな「種類」の動きという意味の多様さ(レパートリーの多様さ)、もう1つは、基本的な動きに「変化」を加えた多様さ(バリエーションの多様さ)である。中村(2012)は、幼児期に習得しておきたい「36の基本の動き」を示している。それら基本的な動きの分類として、「体のバランスをとる動き(平衡系動作)」「体を移動する動き(移動系動作)」「用具を操作する動き(操作系動作)」に分類している。吉田(2015)は、基本的な動きとして46種類を示し、中村と同様に3つに分類をしている。これらの基本的な動きを発達段階に合わせて獲得していくことや組み合わせるなどの変化を加えていくことで、多様な動きが獲得されることが求められていることが考えられる。このことから、幼児期の教育・保育に携わるものは、幼児が発達段階に応じた多様な動きを獲得できるような教材の開発や、環境の整備や指導・援助を計画する必要がある。さらに、それらを的確に実施するためには、養成段階から学ぶことが重要である。

坂口(2018)は、保育を専攻する女子短期大学生を対象とし、領域「健康」で求められる「多様な動き」の捉え方について、作成した運動遊びの指導案の中に見られる動きの種類を調査している。その調査から、「多様な動き」をテーマにした指導案の作成において、移動系の動作を含む運動が多く、平衡系や操作系の動作を組み合わせた運動が少なかったと報告している。蛭原(2018)は、保育内容「健康」の授業の一環として行った運動遊びに関する模擬保育において、大学生(以下、学生)が選択した内容

の分析を行っている。その結果、学生が選択した運動遊びはボール遊びが最も多く、力遊びが最も少なかったことを明らかにしている。最も多かったボール遊びであるが、内訳は狙ったところにボールを投げる・転がす・渡す等の巧緻性を養う内容が多かったと指摘しており、遠くに投げるなどの力強さを養う遊びはほとんどなかったことを示している。

これらのような養成段階の学生にスポットを当てた研究は、幼児期の子どもを対象とした運動遊びの指導内容や基本的な動きを分類して検討したものが大半を占めているが接続期の子どもを対象とした運動遊びの指導内容について検討した論文は見当たらない。

2018年3月幼稚園教育要領改定の基本方針の1つに「小学校教育との円滑な接続」が挙げられている。小学校以降の子どもの発達を見通した上で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を明確にし、これを小学校の教師と共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めることを示している(文部科学省, 2018)。つまり保育者を目指す学生に対して、幼小接続を意識した視点をもって多様な動きを経験することができる指導内容を検討していく力も併せて育成する必要があるということである。そのためには、幼児期に経験する遊びの中で観察できる動きをより具体的に整理し、経験が不足している基本的な動きを明らかにしなければならない。また、発達段階に応じて、発展可能な運動遊びという視点で教材開発をしていく必要もある。

そこで本研究は、上記先行研究により残された課題である、教員養成(小学校教諭・幼稚園教諭・保育士)課程の学生が作成する、接続期の幼児、児童を対象とした運動遊びの教材を分析および検討することとした。多様な動きを経験させる運動遊びに対して学生の捉え方を抽出



することにより、教員養成課程を希望する学生の視点と判断要因を明らかにし、領域「健康」を含んだ体育に関連する授業改善および系統的な指導のための基礎的資料を得ることを目的とした。

研究の方法

1) 調査対象

本調査の対象者は教員養成課程に所属する大学2年生65名であった。調査対象者は、1年次前期に幼稚園と保育園、後期に小学校と特別支援学校への現場見学を終え、2年次前期に小学校への学習支援ボランティアを週1回3時間程度経験している。教員養成課程の現状については、幼稚園教諭一種免許状と保育士資格が35名、小学校教諭一種免許状と幼稚園教諭一種免許状が6名、幼稚園教諭一種免許状と特別支援教諭一種免許状が1名、小学校教諭一種免許状と特別支援教諭一種免許状が10名、小学校教諭一種免許状のみの5名が、各免許・資格の取得を目指していた。

2) 学生が作成した運動遊び教材について

接続期の幼児・児童を対象とした、多様な動きを経験させるための運動遊び教材（以下、学生教材とする）については以下の通りである。

「子どもの体育」の授業において、接続期（年長-小学校1年生）を対象に、実施時間20分程度とし、「多様な動きが経験できるような運

動遊び」をテーマ設定として教材を作成した。対象者57名を16グループに分け、作成した学生教材を基に遊び方を紹介しながら実際にやってみるという活動を毎時間取り組ませた。

なお、学生教材は、①多様な動きが経験できること、②自分たちの準備運動として体ほぐしや心の解放を促すことができるもの、という条件を提示した。使用可能な道具や場所の設定は自由とし、運動を行う回数などの展開についても制限を設けず、各グループで遊び方を決定させた。

3) 基本的な動きの選定

中村（2012）の幼児期に習得したい「36の基本の動き」及び、小学校学習指導要領体育編（文部科学省，2017）を参考に、小学校体育で扱う動きも考慮して、吉田（2015）の基本的な動き（46種類）と分類（操作系・移動系・バランス系）を選定することとした。これ以下、吉田（2015）の基本的な動きと分類を「基本的な動きパターン」とする（表1）。

さらに、各グループの学生教材において見られた動きを抽出し、基本的な動きのパターンに基づいて3つのカテゴリーに分類した。評価間の一致に関しては、発育発達研究を専門とする大学教員と保育内容（健康）の担当経験のある教員および授業担当教員の計3名が独立して評定を行なった。その結果、一致率は79.8%であり、不一致の点は協議して評定した。各グ

表1 基本の動きと分類

操作系	移動系	バランス系
こぐ(ブランコ)・こぐ(自転車) しゃがみつく・持つ・支える 運ぶ・押す・おぶう・投げる 受ける(捕る)・打つ・降る 回す・積む・転がす・掘る つく(ボール)・蹴る・引く つかむ・すくう・縛る	歩く・這う・乗る・登る 降りる・跳ぶ・またぐ・滑る 踏む・跳ねる(スキップ)・走る かわす・くぐる・入り込む もぐる	寝ころぶ-起きる 転がる(揺れる)・回る 渡る・ぶら下がる・止まる 立ち上がる-座る 立つ(片足)・逆立ちする
22種類	15種類	9種類

吉田(2015)より引用



ループの学生教材から抽出された動きの結果については、表2に示す。

結果

学生教材から基本的な動きを抽出したところ、重複を含んだ66個の動きが抽出された。表3は、3つのカテゴリー別による抽出した基本的な動きの割合を示したものである。3つのカテゴリー全てにおいて、学生教材から全く抽出できなかった基本的な動きが存在していることが示された。3つのカテゴリーの結果についてはカテゴリー別に結果を示す(表3)。

1) 操作系の動きについて

操作系の動きで最も多く見られた動きは、「運ぶ」と「つかむ」(ともに38%)であった。また、この2つの動きがセットで観察されていたグループが16グループ中3グループであった。これらの学生教材では片手でしっかり握ることができるボールを使用し、それを移動させるこ

とを競うという共通点があった。「基本的な動きのパターン」によると、操作系の動きは22種類と示されているが、学生教材ではこの動きの中から7種類しか使用されていなかった。

ボールを使用した学生教材を作成したグループは6グループであった。しかし、「投げる」という動きが抽出されたグループは1グループのみであった。ボールを操作する動きとしては「捕る」「打つ」「転がす」「蹴る」「つく」などが考えられるが、そのような動きは抽出されなかった。

2) 移動系の動きについて

移動系の動きで最も多くみられた動きは、「走る」(81%)であった。抽出された「走る」動きには、①直線的に走る動き、②速度を調節したり、かわしたりする動きをしながら走る動き、の2種類が見られた。「基本的な動きのパターン」によると、移動系の動きは15種類と示されているが、学生教材ではこの動きの中から6

表2 学生教材から抽出した各グループの動き一覧

グループ	操作系	移動系	バランス系
1	つかむ・運ぶ	走る	
2	受ける・運ぶ	走る	立ち上がる一座る
3	支える	跳ぶ	止まる
4		走る・歩く・跳ぶ・かわす	止まる
5	運ぶ・持つ	走る	立ち上がる一座る・回る
6	つかむ・引く	走る・跳ねる・かわす	止まる・回る
7	つかむ・運ぶ	走る	立ち上がる一座る
8	つかむ	滑る・かわす	立ち上がる一座る
9	つかむ・運ぶ	走る	立ち上がる一座る・止まる
10		走る・歩く・跳ぶ	立ち上がる一座る・立つ(片足)・止まる・寝ころぶ一起きる・回る
11	つかむ・投げる	走る	立ち上がる一座る
12		走る	止まる・回る
13	運ぶ	走る	立ち上がる一座る・回る
14		走る	立ち上がる一座る
15			転がる・寝ころぶ一起きる
16		走る	立ち上がる一座る・止まる



表3 学生教材から抽出した動き

操作系	移動系	バランス系
持つ(1)・支える(1) 運ぶ(6)・投げる(1) 受ける(1)・引く(1) つかむ(6)	歩く(2)・跳ぶ(3) 滑る(1)・跳ねる(1) 走る(13)・かわす(3)	寝ころぶ一起きる(2) 転がる(1)・回る(5) 止まる(7)・立つ(片足)(1) 立ち上がる-座る(10)
7 / 22種類	6 / 15種類	6 / 9種類

()内の数字は、観察できた回数

種類しか使用されていなかった。

決められた場所まで移動してから戻ってバトンタッチをするリレー形式の学生教材を作成したグループは6グループであり、そのうちの5グループは、移動の手段を「走る」に設定していた。操作系の「つかむ」や「運ぶ」という動きを取り入れていることから、「這う」「滑る」「跳ねる」などの動きを採用する可能性が考えられたが、「這う」動きの抽出はなく、「滑る」「跳ねる」についても低値（ともに6%）の抽出割合に留まり、学生教材の多くは「走る」動きを選択していることが明らかとなった。

3) バランス系の動きについて

バランス系の動きで最も多く見られた動きは、「立ち上がる-座る」（63%）であった。自分の順番が来たら「立ち上がる」、戻って来たら「座る」という約束事を入れていることによって、リレー形式を採用したグループなど多くのグループが使用することに繋がっていることが明らかとなった。次に多く見られた「止まる」（44%）の動きは、移動系の「走る」動きと併せて使用されることが多く示された。リレー形式や鬼遊びの要素をもったものまで、「走る」と「止まる」は活動中に何度も観察されることが予想される動きであった。「基本的な動きのパターン」によると、バランス系の動きは9種類と示されており、学生教材でも6種類の動きが使用されていた。使用されていない3種類は「渡る」「ぶら下がる」「逆立ちする」で

あり、これらは園庭や運動場に常設してある遊具を利用することで表出可能な動きであることが考えられた。

考 察

本研究では、教員養成（小学校教諭・幼稚園教諭・保育士）課程の学生が作成する、接続期の幼児、児童を対象とした運動遊びの教材を分析および検討することで、多様な動きを経験させる運動遊びに対して学生の捉え方を抽出することにより、教員養成課程を希望する学生の視点と判断要因を明らかにし、領域「健康」を含んだ体育に関連する授業改善および系統的な指導のための基礎的資料を得ることを目的とした。

1) 学生教材における動きの抽出割合について

「基本的な動きのパターン」をもとに動きの抽出を行なった結果、19種類の動きが確認された。幼稚園では年間を通して45種類の基礎的運動パターンのうち、4歳児で42種類、5歳児で43種類が見られ多様な運動パターンが観察されていたという吉田（2016）の報告と比較すると、非常に少ないことが明らかとなった。上述の先行研究とは、自由遊びを含んだ運動遊びを対象にしている、という条件設定の違いはあるものの、学生教材の内容だけでは幼児が経験できる動きの種類が少ないこと、そのことが原因で動きが単調になり、運動遊びの質や量に影響を及ぼすことが考えられる。



また吉田(2016)は、小学校低学年の体育授業でも同様の調査を行っており、小学校1学年では頻度の高い運動パターンが非常に少なく、頻度の低い運動パターンが多いことを報告している。このことについては、幼児期に多様な動きを経験しているが、児童期への接続を意識した内容になっておらず、運動パターンの側面では幼児教育との円滑な接続が図られているとは言えないと言及している。本研究の学生教材においては、接続期の幼児または児童を対象として作成しているが、抽出された動きが19種と少ないことや、頻度の少ない運動パターンが多いという点において、先行研究の調査結果を支持するものであった。

なお、本研究においては、大学2年生を対象としており、実習経験がないことや、小学校の学校支援ボランティア参加中であることも、小学校の体育授業に対して、強いイメージを持っていることが関係していると考えられる。このことから、実習経験のない学年には幼児の運動遊びについては、幼児期運動指針(文部科学省, 2012)策定後、出版された多くのガイドブック等を活用しながら、発達段階に応じた具体例を示しつつ、教材作成に取り組みせる必要があるだろう。

2) 学生教材で扱われる動きの特徴について

「基本的な動きパターン」全46種類の中で、多くの学生教材から抽出された動きが確認された。操作系の動きでは「つかむ」「運ぶ」、移動系の動きでは「走る」、バランス系の動きでは「立ち上がる-座る」である。先行研究によると、5歳児を対象に基本的な動きの出現頻度を調査したところ、子どもは座ったり、しゃがんで遊ぶことが多く、その前後に歩いたり走ったりする動きが確認されており(真砂, 2018)、幼児期から小学校低学年の幼少年期を通して観察されやすい運動パターンとして示されていた結果

を示唆するものであった(吉田, 2016)。このことから学生教材で多く見られた動きの運動パターンについては、比較的取り入れやすい動きであったと言える。一方で、学生教材では「子どもにとって身近な動き」としての採用を促しているが、普段の生活の中であまり行う頻度が少ない動きをあえて取り入れるという視点・感受性が乏しいとも感じられる。

学生が行う模擬保育での指導内容は、「ボール遊び」が最も多いが、「ボール送り」「ボール運び」と言ったボール操作技術を高める遊びが多くみられたことが報告されている(蛭原, 2018)。本研究の学生教材においても、ボールを使った遊びを採用しているグループが6グループと最も多かった。しかし、ボールを操作する動きとして「捕る」「打つ」「転がす」「蹴る」「つく」などが考えられるが、そのような動きは抽出されなかった。これらについては、蛭原(2018)の示した結果と考察を支持する結果となった。しかしながら、ボールを遠くに投げる力が求められる幼児運動能力検査および新体力テストの観点を踏まえると、「投げる」動きを意図的に経験させて投能力を伸ばすことができる遊びを考えていく必要があるだろう。今後については、授業で焦点を当てて扱っていく必要性が改めて示唆された。

今後の課題

本研究において、①多様な動きが経験できること、②自分たちの準備運動として体ほぐしや心の解放を促すことができるものという条件下において作成した学生教材から、実習経験のない学生が捉えた動きの特徴を把握することができた。このことは、今後、学生が子どもの運動遊び指導に携わるために必要な知識や視点について、「保育内容(健康)」「体育科指導法」で系統的に指導していくための知見を得られたと



言える。

しかし、限界点もある。第1に、本研究は一時点のデータを扱った横断的な研究のため、実習を経て学生の捉えがどのように変化していくのかを捉えることができなかった。小池ら(2017)は、模擬保育や教育実習での主活動指導実践の積み上げと学生の指導技術の習得の関連を明らかにするために4回の縦断的な量的調査を実施している。その結果、2回目から4回目の調査にかけて、指導技術習熟度が有意に高くなるという結果を報告している。学生は実習前の事前模擬保育では指導スキルのイメージの想起、本実習での指導スキルの覚醒、事後の模擬保育での省察・定着といった過程を辿ることで指導スキルが獲得されるのではないかと考察している。この先行研究は指導スキルに関する知見ではあるが、教材作成についても同様のことが言えるのではなかろうか。本研究では調査対象者が実習前の学生であるため、多様な運動遊びのイメージを想起と考え、実際に幼児との関わりを実習現場で経験したのちに、再度、運動遊び教材を作成することで、学生の実習前後における動きの捉え方の変化を検証することが可能となり、より詳細な分析結果が確認できるであろう。これらを踏まえた上で、指導内容の系統立てを再検討する必要がある。

第2に、遊びを発展させることで多様な動きを経験することができる運動遊びへと発展させるという視点での検討ができなかった。

運動遊びの中で2回戦を行う際に、新たな動きを取り入れることができるように、初戦とは、場の設定を変更したグループが存在した。このような視点は、幼児期の運動遊びの効果を考える際に、重要な視点となり得る。鈴木(2017)は、年長児のドッジボール遊びと心理社会的効果との関係を検討している。そこで見られた展開は、ドッジボールの最低限の形が保

育者によって提示された後、子どもたちの試行錯誤によって徐々に形づくられていき、後半になるにつれて他者と調整をしながら状況を再構成したり創意工夫したりする行動が子どもたちに見られたと報告している。幼児期の子どもであっても、試行錯誤しながら自分たちでゲームを創作して楽しむことが可能である。それならば、遊び込むことによって多様な動きや他者との協働が経験できるような自由度が高く、子どもたちが長期的に楽しむことができる学習教材の開発という視点も必要であると考えられる。そのためには、学生の教材作成を行う際に、「繰り返し遊べること」や「子どもたち自身で遊ぶ場が準備できること」など、条件を提示する必要が考えられた。学生にどのような条件を提示すると効果的であるかについては、引き続きの検討課題である。

引用・参考文献

1. 森司朗・杉原隆・吉田伊津美・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮・近藤充夫(2010) 2008年の全国調査からみた幼児の運動能力, 体育の科学, 60, 56-66.
2. 中村和彦・武長理栄・川路昌寛・川添公仁・篠原俊明・山本敏之・山縣然太郎・宮丸凱史(2011) 観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達, 発育発達研究, 51, 1-18.
3. 町田太郎・吉田伊津美(2008) 幼児の運動能力と園での好きな遊びの時間に見られる基本的動作との関連, 日本発育発達学会第6回大会抄録集, 48.
4. 文部科学省(2012) 幼児期運動指針
5. 吉田伊津美(2015) 楽しく遊んで体づくり! 幼児の運動あそび「幼児期運動指針」に沿って, チャイルド社, 8-17.
6. 中村和彦(2012) 運動神経がよくなる本, マキノ出版



7. 坂口将太 (2018) 領域「健康」における“多様な動き”の捉え方に関する一考察, 聖和短期大学紀要, 4, 21-25.
8. 蛭原正貴 (2018) 運動遊びに関する指導内容の分析～保育内容「健康」における模擬保育を通して, 長崎女子短期大学紀要, 42, 186-191.
9. 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説
10. 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領解説体育編
11. 吉田伊津美 (2016) 幼稚園の運動遊びおよび小学校低学年体育で観察される基礎的運動パターン, 発育発達研究, 70, 48-54.
12. 真砂雄一 (2018) 幼児における基本的な動きの種類と出現頻度について, 小池学園研究紀要, 16, 99-106.
13. 小池美和子・香川実恵子 (2017) 模擬保育・教育実習実践経験度と主活動指導技術習熟度の関連-幼稚園教育実習受講学生への縦断的調査を通して-, 松山東雲女子大学人文科学部紀要, 25, 42-48.
14. 鈴木裕子 (2017) 幼児期における運動遊びの心理社会的効果-5-6歳児のドッジボール遊びに着目して-, 愛知教育大学研究報告, 教育科学編, 66, 29-37.



A Study on Viewpoints of University Students on Various Movements : Focusing on the Transition of Physical Play from Preschool to Elementary School

Rie Yuasa¹
Shinsuke Matsuo²
Ryo Matsuda³

This study aimed to understand how university students view various physical movements, and to obtain fundamental materials to help improve lessons related to physical education, including the content of “health”, and to allow systematic teaching. For this purpose, we analyzed and investigated teaching materials for physical play, targeting the transition period between preschoolers and school-aged children, developed by students enrolled in teacher training courses (teachers of elementary schools, kindergartens, and nursery schools) who had no practical teaching training.

The main findings showed that of 46 patterns of fundamental movements chosen, only 19 patterns familiar to infants and pupils were extracted as fundamental movements that could be observed with the teaching materials developed by the university students. Given that the Physical Activity Guideline for Japanese Young Children recommends incorporating various movements into play, a perspective that deliberately incorporates infrequently performed movements in daily life is needed. However, analysis of the teaching materials developed by the students indicated that this was insufficiently addressed. In future work, it will be necessary to explore how students change their viewpoints after practical teaching experience, as well as what kinds of teaching contents are effective to incorporate various movements into play.